様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２８７０

研究課題名（和文）文法項目の習得難易度から見た英語の発達指標の構築

研究課題名（英文）The difficulty order of some English grammatical items

研究代表者
吉田　智佳（Yoshida, Chika）

天理大学・国際学部・准教授

研究者番号：００３８８８８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は日本語を母語とする英語学習者がある文法項目について「どのような点の習得が容易であり」「どのような点の習得が難しいのか」を明らかにすることであった。
本研究では文法項目の中からwh-疑問文と前置詞を選び、その習得困難度を調査した。その結果、wh-疑問文においては主語を問うwh-疑問文の習得が一番難しく、特に、主語と述語動詞を一致させる段階が難しいことが判明した。
前置詞については、16種類の用法の異なる前置詞を選択し、その困難度順序を調査した。その結果、場所を表すonと期間を表すforの習得が容易である一方、方向を表すforと所属を表すonの習得が一番難しいことが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
文法項目の習得難易度を示すことは英語の教育現場での指導において有効であると考える。習得が容易である項目にはそれほど時間を費やさずに済む一方で、習得が困難である項目には時間を費やして丁寧に指導できる。さらに、その学習者がつまずく要因が明らかになっていれば、その点に注意した効率的な指導が行える。

研究成果の概要（英文）：The purposes of this study to investigate which aspects of grammatical items are easier and which ones are more difficult to acquire for Japanese adult L2 learners of English (JLEs). We selected two grammatical items: wh-questions and prepositions as target items. As for wh-questions, the most difficult type of wh-questions is subject wh-questions. In particular,the agreement between subjects and predicate verbs was the most difficult for JLEs. We also discussed why the agreement was difficult for JLEs.
With regard to prepositions, sixteen types of frequently used prepositions were examined. The easiest prepositions to acquire were spatial "on" and durational "for" and the most difficult ones to acquire were directional "for" and possessive "on".

研究分野：第二言語習得

キーワード：第二言語習得　wh疑問文の習得　前置詞の困難度順序

１．研究開始当初の背景

これまで日本語を母語とする英語学習者を対象とした個別の構文については数多くの習得研究があった。文法の習得においては一定の発達段階があると言われている(Larsen-Freeman & Long, 1991; Lightbown & Spada, 2013)が、文法項目の中には、教えられたり、一定の習熟度に達すれば使えるようになる項目がある一方で、いつまでも誤りが残る項目があることも報告されていた。しかしながら、当初、第二言語習得研究の分野では、対象とした文法項目の困難度順序に焦点を絞った研究、つまり、文法項目の「どのような点が（他の点よりも）容易であり、あるいは困難であるのか」というところに焦点が絞られた研究はそれほど多くはなかった。

２．研究の目的

上記のような背景の下、本研究の目的は特定の文法項目の困難度を調査し、当該文法項目の「何が習得できていて」「何が習得できていないのか」を記述的に調査することであり、その困難度要因を考察することである。さらに、「なぜ難しいのか」を考察することにある。困難さの要因を特定できれば、その要因に合わせた指導法を考案することができるからである。本研究は効果的な指導法を検討するための基礎研究として位置づけられる。

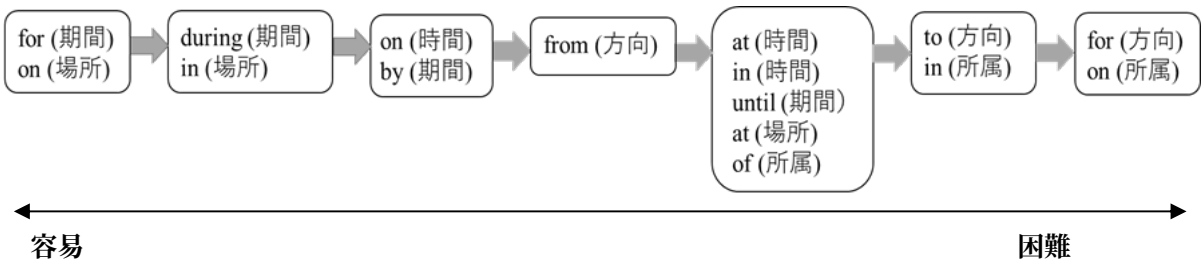
３．研究の方法

本研究では、日本語を母語とする英語学習者（大学生）を対象に、統語的な誤りがしばしば観察される文法項目の一つである、wh-疑問文と、用法の誤りが多い項目の一つである前置詞の困難度順序について調査を行った。wh-疑問文については発話産出テストを、前置詞については多肢選択式の空所補充テストと英文を日本語に訳すテストを実施し、そのデータを分析した。

４．研究成果

(1) wh-疑問文の発達順序について：主語 wh-疑問文（主語の部分を問う wh-疑問文）の習得が日本語を母語とする英語学習者にとって一番困難であることが分かったが、他のタイプの wh-疑問文については様々な要因が複雑に関与していたため、明確な困難度順序の特定化には至らなかった。しかしながら、その主語 wh-疑問文の発話の中で一番習得が困難な段階は、主語である wh-句と述語動詞の一致の段階であることが判明した。つまり、学習者の誤りの多くは助動詞 do の誤挿入が多く観察されたのである。このことから、日本語を母語とする英語学習者が英語の wh-疑問文を習得する際には、疑問素性(Q 素性)の値が[+Q](=wh 句を文頭に引き寄せる特性)と[-Q](=wh 句を文頭に引き寄せない素性)の 2 つの値だけではなく、[+Q]の中に「引き寄せる」と「(引き寄せたら）消える」という 2 つのパラメータが存在する可能性が示唆された。

(2) 前置詞の困難度順序について：前置詞は他の文法項目と比べて出現頻度が高いにもかかわらず、正しく使用するのが難しい項目であると指摘されている(Yamaoka、1995、高木、2006 など)。しかしながら、前置詞の習得は困難だと主張されている割には、前置詞の困難度を調査し、その困難さの要因を探ろうとする研究はあまり行われてこなかった。そのため、中学校や高等学校の英語教育の現場では前置詞の「何を、どのように」指導すればよいのかわからないのが現状である。指導法を検討する土台となる基礎研究を行うために、頻繁に使用される 16 種類の異なる前置詞の意味・用法について困難度調査を行った。具体的には場所を表す前置詞(at, in, on)、時を表す前置詞(at, in, on)、期間を表す前置詞(during, for)、期限を表す前置詞(by, until)、方向を表す前置詞(for, from, to)、所属を表す前置詞(in, of, on)の困難度順序を調査した。その結果、【図 1】が示すような 7 つのグループに分けられた。



【図 1】

さらに、用法別に見ると、期間を表す前置詞(for, during)の習得が一番容易であり、方向を表す前置詞(for, to)が一番習得が困難であることが判明した。前置詞の困難度順序は前置詞の意味・用法に大いに関係がある。このような困難度順序になる理由として頻度や母語の影響、前置詞の補部名詞句の影響などが考えられる。

＜引用文献＞

①Larsen-Freeman, D & Long, M. H. (1991). *An Introduction to second language research*. Longman: London.
②Lightbown, P. M. & Spada, N. (2013). How languages are learned. OUP: Oxford.
③高木紀子(2006)「日本人英語学習者の前置詞習得に関する研究 (2)―前置詞の多義性に焦点をあてる―」『東京家政大学紀要 1』, 205-216.
④Yamaoka, Takashi (1995). “A prototype analysis of the learning of “on” by Japanese learners of English and the potentiality of prototype contrastive analysis (part 1). *Hyogo University of Teacher Educational Journal, 15 (2)*: 51-59.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①吉田智佳 (2018). 「日本人英語学習者による主語 wh-疑問文の習得過程」、『外国語教育―理論と実践―』、査読あり、第 44 巻、pp.1-17

②吉田智佳 (2017). 「日本人英語学習者の wh-疑問文の発達指標」、『天理大学学報』、査読あり、第 244 巻、pp. 51-75
URL: http://opac.tenri-u.ac.jp/opac/repository/metadata/4183/

〔学会発表〕（計 2 件）

①吉田智佳 (2018). 「日本人英語学習者の前置詞習得における母語の影響について」、第 44 回全国英語教育学会（京都大会）

②須田孝司・吉田智佳・白畑知彦 (2018).「日本人大学生の英語前置詞選択に関する一考察」、第 44 回全国英語教育学会（京都大会）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
①研究分担者氏名：白畑知彦
ローマ字氏名：Shirahata Tomohiko
所属研究機関名：静岡大学
部局名：教育学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：50206299

②研究分担者氏名：須田孝司
ローマ字氏名：Suda Koji
所属研究機関名：静岡県立大学
部局名：国際関係学科
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：60390390

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。